「負の感情」「悪」の問題が本パネルの統一テーマであるが、それを包むものとして、成熟、忍耐、待つことの重要性が、すべての発題から、聞き取れたように思う。知恵や愛や慈悲が高まるには、成熟が必要で、それには時間がかかり、待つこと、忍耐が必要である、ということではないだろうか。「悪」の体験を、修行の中でどれくらい許容するかというのは、実践的な工夫の問われるところであるが、鈴木大拙が行なったような、「魔王」のロールプレイは、実害のないよう場所を区切る、結界の工夫かと思う。「悪」と呼ばれる暗い土壌の経験は、成長のために不可欠だからでもある。鶴岡の言う、妬みや不安が、闇の中にありつつ、喜ばしいものになっていくのは、愛の成熟であり、井上の言う、微欲に気づくようになるのは、知恵の成熟であり、永澤の言う、魔を包み込むのは、慈悲の成熟と思われる。

島薗が浮き彫りにしたのは、至高の地位を、国家や王などが占める際に、宗教の思想や実践が内実を提供する、という回路である。そういう回路しかないとき、それにどう抵抗するか、という社会実践の問題は、深刻であるが、行くところまで行かないと、できないのではないか、とも考えられる。時代精神という強力な流れがあり、戦争の世紀には、平和の思想は流通する回路がないからである。逆に、平和を目指す時代精神の中では、平和な思想の回路に、大量の言葉が流れるのではないか。であれば、時代精神を変えることが課題となる。これにも時間がかかり、忍耐、待つことが必要とされる。

「悪」について、鎌田の言う「はっきりした善悪二元論ではなく」というのも、重要なことである。鶴岡が指摘するように、何が善か、悪かは、決めがたい。仏教の「諸悪莫作、諸善奉行」というわかりやすい指針より、むしろ、易経の、積不善の家に余殃あり、という観察のほうが、統計的で、緩やかな知恵を与えるかもしれない。関連して、スピリチュアルなメッセージの中に、「悪」は未熟さ、愚かさから起こる、という表現がある。霊的な真理を知れば人を苦しめないし、悲観しない、というように、人間が自他を苦しめるのは、未熟さの故である、という教えである。仏教の「無明」も、キリスト教の「原罪」も、魂の未熟さに由来するものとして、位置づけられないだろうか。

鎌田が提起した「審神者（さにわ）」の問題について、もともと大本とその前後では、憑依託宣する神霊の身元調べ、正邪、高低が問題になったが、神霊をカッコに入れて一般化すると、体験している人間の身元調べ、筋調べが、課題になる。体験者がどのようなトラウマをもっているか、犯罪歴のようなもの、あるいは改悛歴のようなものも、行動の傾向、倫理的な基盤として、宗教体験を「評価」する参考になるとすれば、教祖が薬事法違反などを起こしていたことは、無視できない要素になる。千石イエスが麻原について、障害があって辛い思いをしたのなら、自分より弱い者をいじめるのではなく、むしろ弱者に優しくならないといけないのに、そうなっていない、と批判していたように、病歴や犯罪歴があっても、見事な治癒経験や改悛歴があれば、評価は逆転する。

「美」と「ユーモア」が負の感情を解毒するという鎌田の指摘、「涙」が儀礼の行き詰まりを打開したという永澤の指摘は、どちらも闘争や緊張を緩める要素への注目であると思う。オスカー・ワイルドが、労働者の荷物を持つのを手伝って、感謝されたとき、これまでにない喜びを覚えた、というエピソードがあるように、先端を歩む者が、敢えて幼児や動物の世話をすること、家事や地域の慈善活動をすることなどは、日常の中で身をかがめることであり、これによって、非日常的な極地を目指す「力み」が、緩むのだと思う。精神医学で「退行」の著しい効果が報告されてきたことと、響き合う知恵ではないだろうか。